

田井みゆき（NPO法人ノラベル理事長・精神保健福祉士）

はじめに

こんにちは。今、ご紹介いただきましたNPO法人ノラベルの田井と申します。午前中から、お歴々の先生方のお話を皆さんお聞きになって、突如NPO法人のと書いてあると、だれが出てくるねんという、その興味だけで今日来たよという方も中には一人二人おられるのではないかと思うんですが、こんなんです。どんな活動をしてるのかというのを長々としゃべりますとそれだけで時間を押してしまいます。8月に出ささせていただきました2冊目の本なのですが、『パスポートは特性理解』（クリエイツかもがわ）ということで、特に特定不能の広汎性発達障害、これ、午前中に杉山先生がお話をされた発達の凸凹というのを、私は特定不能の広汎性発達障害というふうに判断をさせていただいて、それでチームサポートをさせていただいてる精神科の先生と共通言語として持たせていただいています。その方を中心に、どんな活動をして、ノラベルが何をして、今後の活動は何なのかというのが詳しく書いてございます。

NPO法人ノラベルについて

ノラベルというのは、活動を始めて9年目の民間団体だったんですが、一番最初は、京都ひきこもりと不登校の家族会ノラベルというのを、4組の親御さんと私とで立ち上げまして、親御さんと支援者・援助者がともに活動をするという会という、家族会とかでもないし、親の会でもないしという不思議な形をとったというので新聞が結構取り上げはったので、4組でスタートした4カ月後に40組になって、でも、お世話してるのが私一人であって、えらいどないようになって、「また新聞記事にこういう会ありますで、載せます」と言われたときに、「済みません、ボランティアさん募集というのも2行ほど載せてもらえませんかね」と言ったら、そのボランティアのこと

に関しての問い合わせの方が多かったという記事になってしまったのが、今から考えたら9年前だなというふうに思います。最初、不登校とひきこもりのというふうに名乗ってましたのでいろんな方が来られるんだけど、支援者・援助者がかかわっているというのを、皆さん記事とかで読んでくれるので、言うたら、いろんなところに相談に行ったんだけど変化がない、なので来ましたみたいな、何か最後の駆け込み寺的なことだったり、暴力・暴言がすごかったりとか、という方がどっと来られて、大変な会になってきました。去年の4月にNPO法人を獲得し、事務局を3カ所目のところに移り、そして、今年2月に、利用者さんの経済的負担をできるだけ少なくしようという、私たちの悲願であった指定サービス事業所に2月に認定をされて、今NPO法人かつ事業所として活動をしているという会です。

事例 A君（16歳）

今日は、事例の方をお話しさせていただくのは、今々かかわらせていただいている、お話をちょうだいしたときに、学童期・思春期に当たるので、いや、私のところは成人の高機能の広汎性発達障害者の方とその家族をサポート、NPO法人ノラベルという形でやっておりますので、小学生さんとか、中学生さんの相談ももちろん受けるんですけど、そんなに、成人、主に8割以上が20歳以上の方、一番上の当事者さんになりますと70歳代の方というふうになりますので、自信ないんですけど一応お返事を返したところ、今までにかかわってきた思春期、思春期といっても、本当に発達さんの場合、30歳ぐらいまで思春期だよなって私は思っていると、きっとどっかでしゃべってるのを聞いてくださったのか、寛容に受けとめてくださってお話してくださいということなので、お受けをいたしました。ちょうどそのお話いただいたところに、特別プロジェクト的に対応させていただいてる一人の青年がいます。現在進行形です。それで、今回、こういうことがあるのでそのお話をさせてもらってもいいかなというふうにお母さんと本人さんに言ったら、私のことで役に立つのであればという快諾をちょうだいして、これをさせていただくことになりました。

事例報告をさせていただきますが、その中から、ノンラベルでのその生育歴の聞き取り方とか、判断の仕方、それから援助の仕方というのが、読み取っていただけたらなというふうに思います。

A君、16歳です。生育歴は、妊娠中のときから私のところはお聞きいたします。初回面談というのは、必ず親御さんに来ていただいて、大体2時間から3時間かけてしっかりと聞きます。この生育歴を聞くということが、発達障害があるかどうかというエピソードをきちんと見つける、誤診を防ぐとても重要なことと私は位置づけております。チームサポートをしていただいている精神科の先生方も、この生育歴をまずノンラベルに行ってとってきてこれへんかというふうに、まず患者さんに振られるというケースもふえてきているぐらい、結構それを大切にしてくださっています。

彼の場合は、妊娠中、出産時、それから乳幼児のときには全然問題なく、もちろん乳幼児健診は全く問題・注意なしで来ています。小学校1年のとき、これはお母さんが語られるというか、こちらが発達に偏りがあるかどうかのエピソードをつかみたいという質問形式でいってしまいますので、それに対してお母さんが答えてくださった分です。

小学校1年のときに、家族でトランプ等のゲームで自分が負けそうになるとかんしゃくを起こして投げ出す行為が出る。彼は弟さん、二つ違ひかな、の弟さんがおられるんですけども、弟さんがそれをするんじゃない、長男である、お兄ちゃんである彼がそれをしたということ。そうだなという感じで、まず1カ所目思うわけです。ボール遊びでもうまくいかない相手が悪いとふてくされる。そうやなと思うわけです。プライドは高く、少しやっつてできないと全く努力しない傾向が出る。リレーで負けると悔し泣きをした、無口である。大体この辺までお聞きすると、発達の過程で、お持ちだなということがわかるわけです。

小学校3年になると、自分から友達の前に入っていくことができない。声をかけてもらうのを待つ。声をかけてもらったなら入れるんですけど、一たんその輪に入ったからといって、じゃあ、その次の日、自分からそこへ入っていくかという、そういうことはしないわけです。また声をかけてもらった

ら入るというふうな状態を呈していました。友人とのトラブルで相手をひっかいたことがあると。お目にかかったときには、そんなひっかくとか、暴力があるような青年に見えなかったですけど、小学校5年、リーダー的な子の言いなりになっちゃうと。私のところのオリジナルチェックリストにもあります、嫌が言えないお人好し傾向。これでキャッチセールに大人になってからひっかかれて、えらいローン、借金抱えはってというケースも多々ご相談の中にあります。嫌が言えないことにやっぱり悩み始めます。しかし、小学校6年間は不登校なしで、成績は上位です。得意科目は国語と絵、不得意は算数と球技。

それから小学校4年から進学塾へ行くようになられて、小学校のとき、修学旅行、卒業式参加されましたか、というふうに面談でお聞きすると、修学旅行行ったんですけど、食事がほとんどとれずに非常に疲れて帰宅して帰ってきたんだけど、楽しかったと言いましたと。でも、決してその言ってる感じは楽しい感じじゃないと。それは、多分、修学旅行に行つて、帰つてきて解散のときに、今日、みんな修学旅行楽しかったよねと先生が言うと、そうなんだ、修学旅行は楽しいんだ。だから、おうち帰ったら楽しかったと言ふんだ。でも、お母さんが見た感じ、ぼろぼろずたずたで帰つてきてるといふ感じだったと聞いています。

それから、中・高・大一貫校に合格します。無気力感が高まっていきます。言いなりにならざるを得ないこと、また友人とトラブルになったために、中2に進級の際に、親御さんが、ちょっとクラスを分けていただけませんか、本人はその子に何かを言われると嫌と言えないので、クラスを分けるという距離をとってもらえませんかというふうに、このころはまだ診断も受けておられません。そういう申し出をされて、学校はそれにはこたえてくれました。このころから、お母さんと2歳下の弟を殴る、けるの暴力が出始めるわけです。学校でやっぱり自分が嫌と言えない相手に何かをさせられる、自分が何かでしかられるとかいう理不尽とか不本意さが積み重なつてストレスを、家の中でお母さんや弟さんに暴言を吐いたり、暴力をすることでやっぱりバランスとりをしてたのかなと。そのバランスとりに使われるお母さんや弟さん

は大変なんだけど、本人さんはそれで持ちこたえてくれてたのかなという気がいたします。市の相談機関にまずお母さんが相談に行かれて、週に一度の相談を、お母さんは、ノンラベルに来所するまで多分1年ぐらい続けて行われてたんだけど、発達障害の「は」の字が出なかったというふうに言っておられます。

それから、中2になりますと、同級生の一人に自分の秘密を話したんですね、思春期らしく。それをみんなに話されてしまい、人間不信となります。声をかけてくれる同級生とはつき合うという状態、家以外では言いなりになり、しおらしい状態を出すと。だから、家では弟さんやお母さんに暴言も吐くし、たたくし、けるしというのがあるんだけど、外ではすごいしおらしいタイプ、はい、はいという感じをしていると。3学期末には成績不良となって、提出物が期限までに出せない。これはチェックリストに絶対上がってきます。それから、落とし物、忘れ物が多い。そういうことがあって、高校推薦が難しいと校長先生に言われて、おれ、やばいと追いつめられるわけです。追いつめられますと、期限ぎりぎりになると頑張りはるというのも特性にありますよね。なので、本人なりに勉強を頑張っ、中2のとき、授業を上の方で聞いていると言われてたんですけど、2学期、高校への内部推薦が決まって、決まったよとおうちの人が言うと、うん、そんなん当たり前やというふうに。進級できないかもしれないと思ったら、おれ、やばいとどんと落ちるんですけど、ほんと進級決まったよという、そんなん当たり前やん、僕できてという、ゼロ-100、白-黒ですね、発想がちょっと褒めるとほんと舞い上がってしまうという、そういう特性があるんだなというふうに思います。

それからしばらくして、登校時に吐き気が出だします。倦怠感が出だし、3学期の始業式の次の日から、ぱたっと学校へ行かなくなります。このぱたっと不登校というのも、アスペルガーさん及び特定不能さんにはよくあります。さみだれ登校から気がついたら完全不登校になってましたという人がなくはないんですけど、よく、私が判断基準に使うのは、じゃあ、ぱたっと行かなくなりましたかと言うと、はいとお母さんが言われるケースが非常に多

いです。そのときに、大概、本人さんが出す言葉が、「学校はもういいわ」と言うんです、それにも含みがあるなというふうに思うんですけれども。

ご両親がそのころ放送されたテレビをごらんになって、あ、うちの子、ADHDと違うやろうか。それは、多分、忘れ物とか提出物が期限に出せないという点だけでそう思われて病院を受診するんですが、そこでアスペルガー障害ですねと簡単に診断がおりてしまう。修学旅行、卒業式とも中学生のときには不参加で過ごします。

高校は、入学式のみを出席してぱたっと行かなくなります。担任の週1回の家庭訪問が始まります。高校は5年まで在籍できると最初に言われたんですけども、不登校が続くと出席日数が足りないのでもと留年の話が出始めます。その辺から非常に本人さんが荒れ出すわけです、焦りですね。

ノンラベルへの相談：初回面談

このころにお母様がノンラベルに相談に来られました。初回から今までの生育歴をずっとお聞きをして、それから日常生活もお聞きをするわけです。睡眠状態はどうですかというふうに聞くと、夜中、大体12時から1時に寝ていますと。でも、正午ごろにしか起きてこない、朝は起きないというふうに言われます。おふろは毎日入ってるけど、約30分入っていると。不登校を始めてから一切外出をしていませんと。弟を束縛し、雑誌等をコンビニとかに弟をパシリに使うわけです、買いに行かせる、弟さんがもうだめだっちゃうんですけど。お父さんとの関係性が悪くて、お父さんと一緒に御飯を食べるのは嫌といって時間をずらすと。これが何で嫌なのかというのはまだ聞けてない状態なんです、お父さんのそしゃく音が大きいのかもしれないです。母親に暴力を振るい、肋骨にひびが入るというようなところまで暴力がエスカレートします。これは当たり前のこととか、完全に引きこもった状態になると、家の中に第三者が全然入らないので密室状態。密室状態は治外法権になりますから暴力がまかり通ってくるわけです。これで第三者が一步でも家の中に入ると、この暴力というのはぱたっとやむというのは、この8年間活動をしてきて得た支援法です。弟への暴力も続いたので、弟さん

をおばあちゃんのところに預けていただきました。

理屈を言い出すと饒舌になるけど、ふだんは本当に無口、それでも無理からちょっと学校にこの日は行けるんじゃないとか、イベントがあるからとかいうので出かけるときに、電車の中で一度気分が悪くなってから電車に乗れないとか、そのこと考えただけで玄関から出にくくなるという状態をみせます。これは、発達障害の特性云々じゃなくて、いわゆるパニック障害だと思われます。もともと私はパニック障害を専門としてカウンセリングを始めた人間なので、これはパニック障害、安定剤だけで落ちつくのになというふうに思ってたんですけども。お母さんがお話しされたエピソードの中では、遠くで自転車のかぎをなくしたと自転車を担いで帰ってきたと、通常はあんまり担いでは帰ってこないと思うんですね。冬でも靴下をはかないと、これは私も一緒なのよと言いたいところなんですけども。

神経症状とかも聞きます、絶えずいらいらしている。それはいらいらもするよねと思います。人生に疲れた、死にたいと言う。不登校をしているやつと自虐的に言う。時々、大声で叫ぶ、壁をたたく。この場面でこれだけを聞かれたり、見られたりすると、あ、統合失調症と誤診を受けるものすごい状態だと思うんですけども、彼は、統合失調症と診断を受けなかったのよかったです、初診時にアスペルガー障害と診断されますが、継続受診。お薬の処方なくて、その先生は、何かあれば来てくださいと。すごい状態だったんですよ、お母さんは肋骨も折ってはるし、弟さんを避難させんなし、本人は抑うつ的に死にたいとか、暴言も出てる、暴力も出てる。それでやっと受診で連れてきはったときの先生が、「アスペルガーでしょう、うん、何かあればまた来てください」で帰しちゃったんです。「お薬の処方なかったですか」って。「なかったんです」というふうにお母さんは話されました。

ノンラベルでの判断と個別援助計画

ノンラベルでの判断とそれにもとづいて個別援助計画を立てていきます。

生育歴、それから、ノンラベルオリジナルのアスペルガーチェックシートですね、その抜粋は『パスポートは特性理解』の本の後ろにも載っています。

ハイファンクション、PDD-NOSと、高機能の特定不能の広汎性発達障害と判断をいたしました。お母さんからの話では、すごくADHD傾向があるというふうに受け取ってたので、初回は本人さんに会ってないので、私の所見のところには「高機能の特定不能の広汎性発達障害の疑い、ADHDタイプか？」やったんです。本人さんと会うようになって、ADHDタイプ、この人をADHDといったら国民全員ADHDという感じやねというレベルだったです。それから、主治医を変える方向性で相談をして、ご紹介をいたしました。次の主治医は、こちらから生育歴のまとめと、それから、こちらの所見とかも書いてチームサポートをお願いしてる先生方をお願いするんですけども、お返事をくださる場合があって、そのときに、アスペルガーの特性は顕著ではないが、不安が非常に強いと、継続診察をしますというお返事をいただきました。だから、その先生は、アスペルガー障害と断定できるものではないよねというお返事をくださってたんですが、そこまではよかった、よかったという感じになったんですけど、その不安が非常に強いのが何によってなのかということで、抗精神薬、抗うつ剤が処方されました。それで変化なしというふうに書いてるんですけど、いい変化がなかったということなんです。

完全不登校、外出なしによる家庭内密室状態で暴力が、続く可能性が高いために、第三者として、ノンラベルに来ていた学生ボラさんで、その発達のことを学んでくれる人に、ぼつぼつ行けてる学校も、ばたっとこれは時間の問題で行かなくなると思うので、学生ボラさんに家庭教師に行ってくれませんかというふうに援助をし、お母さんには、「家庭教師さんが来ると言ったら、本人うんと言いますよね」と言って、それで確かめてもらい、うんという了解をもらって、完全不登校になる前に、第三者を家の中に1週間に一度入れました。家庭教師が入ったことで家庭内暴力はなくなりました。家庭教師とは、勉強よりかわりを深めることに重点を置き、継続を今もしてもらっています。

家庭教師の学生さんが、ちょうどノンラベルでのボランティアを8月末で、卒論と、それから次の進学受験があり居場所でのボランティアをいっとき休みたいということだったので、その8月末までに彼と一緒に居場所につな

いだという、次の個別援助計画を彼にゆだねました。家庭教師の先生が迎えに行き、そして、一緒にノンラベルまで来て、そして居場所に参加して、また、家庭教師の先生が家まで送っていくという、特別と言えば特別なんだけど、当たり前前の保護的サポートですよ。最初に初めての所、初めての人に会うのはとても緊張の高い人たちですから、安心な人と一緒に来るというのを原則にしていますので、その彼にそれを、お母さんももちろん一緒に来てもらいました。そして、その居場所は、最初は、本当にほかの利用者さんから接触のない個室で、本人さん、お母さん、私、それからもう一人スタッフとひそかに4人でマージャンをするという、何か密室で、何でマージャンみたいな、ですけど、来た日は、水一口飲めない状態の緊張感で来ていましたし、同じ場所、同じ座る位置、同じメンバーでというのを何回か繰り返し、2カ月ぐらい繰り返しますかね。それで、月・木と2回来られるかなとかを続けて、週に2回の通所へ移行をしていきました。

本人さんが在籍する高校に、親御さんの依頼を受けて特性説明にも行きました。このこともぜひお伝えしたいと思って書きました。

これはまだ居場所につながる前なんですけど、特性説明に行くんです。親御さんから、上手にうちの子のためにだけこうこうしてくれないかというのを学校に申し出るというのは、親としてとてもしにくいことなんです。だから、第三者が行く、それから特性がきちんと説明できる、具体的にこうしてもらえないかと簡略化して言える人が行かないと、学校の先生方もお忙しいですから聞いてくださらないというので依頼を受けて行くんですけど、そのときのお答えがとても残念でした。来るか来ないかわからない生徒のために別室を用意することはできない。保健室登校は彼しないと私は思ったので、これもなぜしないかというのは本に書いてます。別室を用意してもらえないかと言ったんですけど、「そんな来るか来ないかわからない生徒のために別室を用意することはできない」と。それから、「私立にはみんな高い授業料を払ってきているので、一人の来ない生徒のために何かをするのではなく、その生徒が退学すれば問題は解決する」というふうに言われました。それから、「学校は民間団体と話をするわけにはいかないんですよ」、と言

わはったんですよ、話してるやんと突っ込もうかと思ったんですけど、そこはあかんと思って抑えたんですけども。チームサポートをお願いしたところ、「私どもは私立なので関係ないです」と言われたときには、こっちがキョトンとしてしまって、なぜ私立だったら関係がないんですかって聞きたかったんですけど、これ以上、私がここでもめて、まだ彼は在籍してますから、すますわけにいかないんで、そうです。長いお時間をいただきましたと言うて、真っ暗になった夕闇を車で寂しい思いで事務局へ帰ったのを覚えています。

はっきり言うて、この学校は無理だと思いました。それまでに何校か私立の高校に出張に行ったことあるんですけど、皆さんすごく熱心に聞いてくださいました。ノートを出してきて、担任の先生、学年主任の先生、それから副校長先生とか、3人ぐらいが出てきてくださって、私がこういうお部屋を用意していただいて、こうしていただいて、学校の先生がこう対応していただいとと言うと、熱心にメモをとって、それは、机はどっちの方向に向けてとかすごく詳しく聞いてくださって、これだけ詳しく聞いてくださるというのは、それだけ熱心にその生徒さんに対してサポートしてくれようかというお気持ちのあらわれなので、これでお願ひしますというて、とてもいい対応をしてくださった学校があります。今回の場合はちょっと残念だったので、これ以上学校と話し合いするのは無理だなというふうに思いました。

ただ、本人は在籍してる高校を続けたいというふうに言語化を私にしてみましたので、家を出る前からその吐き気と気分が悪くなるのを我慢して、お母さんが送り迎えをして何とか登校を試みるんですけども、やっぱり続かないし、行けても1時間ぐらいでやっぱり帰る。帰りしなは超機嫌が悪いというか、疲れと緊張とで、路上でもお母さんに暴言を吐いたりとかいうのはやっぱり出ていました。今のしんどさを継続しても在籍し続けるのか、学びの場を変えるのかという、すごく大きな決断にせまられました。

一応、安心材料として、今の学校をやめたって行く高校はあるんやでという情報を提供しました。というのは、ここをやめたらほかはないって考える傾向があるわけなんです。そういうことも16歳でも知らないということがあるので、今行ってる学校をやめたって違う高校はあるし、そこの高校へ行って

も大学へは進学できるしというような情報を言わないと、15、6歳ならそんなことを知って当たり前が、当たり前には知らないの、すごく不安感を抱えてしまうので、大丈夫、大丈夫、こういう学校がある、こういう学校もあるというふうに言ってやります。そこで、単位制高校を一つ紹介させていただきました。その単位制高校は、ノンラベルが活動を始めたときからともにチームサポートをしてくださって、今までも10何人ぐらい紹介して行っていただいて、全員卒業しているという、いいチームサポートが成り立っている高校です。そこを紹介いたしました。その高校を見学に行きました。ちょっと私は時期的に早いかなと思ったんですけど、僕、単位制高校に行くと。何でそんな早う決断できたんと言うたら、来年、弟さんが高校受験なんですね、彼は、高1を1回留年して、今、高1。今年留年すると、また来年編入した学校でも高1になるわけです。そうすると、弟と同級生、同学年になります。それは兄としてプライドが許さないというのがあって、僕、単位制高校に行く、弟と同学年になりたくないからと言うので、本当にまた新しいその単位制高校には、吐き気とか気持ち悪いとかそんなを我慢しつつ、今、挑戦をしているわけです。

ノンラベルの居場所に週に2回来れてたときには、お母さんと一緒ではあるけれどもなれてこられて、水も飲めなかった状態から、午前中から来て、お昼、ミニカップラーメンとか、おにぎりとかをお母さんと二人で食べることができるようになり、そして、その後、居場所のスタッフとも一緒に食事ができるようになってきています。単位制高校へのトライアルには、外出時に強い吐き気があったけれども登校。レポートを書けるようになりました。居場所では、帰りしなに「疲れた、しんどくなかったですか」というふうに聞くと、「ここは大丈夫」と答えてくれたときに、「ああ、よかった、家以外で大丈夫なところが1カ所できたら次が行けるよ」というふうに声をかけました。

これが、単位制高校は、入るときに試験ではなくて作文を提出ということなので書いて、それをお母さんが読んですごく感動したので読んでもらえませんか、本人の許可を得てきていますというふうに言われて読ませていただ

いて、今回、この発表にも使わせてもらっていいですかと言ったら、どうぞということでした。原文のままです、ちょっと読みます。

「僕が」、〇〇高校というのは次行く単位制の高校です。「〇〇高校でやってみたいことは、普通の学校生活です、なぜなら、今まで僕が通っていた中学、高校では、いろんなことがあってそれができなかったからです。中学に入ってから僕が素の自分であることを否定されることがありました。それから僕は、次第に素の自分を隠すようになり、だれにも嫌われないように、それは、イコール自分が否定されて傷つかないように、当たりさわりのない自分をつくって人とつき合うようになりました。でも、それは一人も友達をつくってないということと同じでした。なので、〇〇高校では、上下関係なく、対等にありのままの僕とつき合ってくれる友達ができたらうれしいなと思います。まじめな話やくだらない話をしたり、時にはどこかへ一緒に遊びに行ったり、御飯を食べたり、勉強したり、前は普通にできていたことが今の自分には難しかったりすることもあるけど、〇〇高校で取り戻して行って普通になったらいろんなことに挑戦したいです。普通であるということは、当たり前だと思ってる人もいます。実際、僕も不登校になるまではそう思っていた気がします。でも、普通でいられるということは、とても幸せなことだと思うようになりました。なので、まず〇〇高校での僕の第一目標は、普通の生活、そして、普通の、できれば楽しい学校生活が送れるようになることです」

私もこれ読んだときに、今読んでもちょっとじわっとくるんです。彼がずっと小・中では普通だったんですね、自分の感覚では。それが何となく人と違う小さな違和感の積み重ねが中・高に入って出てきて、そして、そのことで心身症状が出、神経症状が出だしてすごく苦しんだ、殴りたくもない親を殴った。お母さんを泣かせたということの自責ですね。自責の念がすごく強くて抑うつ状態にもなっていました。でも、作文には本当に本音というか、今、彼が考えてることが書かれています。だから、自分は普通なだけけど、ちょっと今普通じゃない。でも、きっと単位制の高校に行ってみんなと普通をやってみたら普通になるんじゃないかというふうに考えてる。今後、

彼とその障害受容についてのその寄り添いというのは、単位制の高校も、今から2年間ですかね、2年間はしてくれますし、また、そのお休みのときには今きている居場所を継続してくれるので、私たちと話をしながら、少しずつ障害受容をしていく。普通とは何ぞやというところ辺から話がしていけるかなというふうに思います。

検討課題

検討課題についてお話をします。当初、ノンラベルで半年は居場所通所を続けてもらって、服薬と行動療法でパニック障害のパニック不安の軽減、それからPDD-NOSの特性の緩めを考えていました。しかし、本人さんの弟と同学年にはなりたくないという気持ちを尊重すべきではと考えて、単位制高校の先生、御両親とも相談を重ねて編入、週2回の登校となりました。数回は気分の悪さを押し立てて頑張って登校が可能となっていますが、近く、終日のスクリーニングに不安と緊張が出ています。本人さんの意思の尊重というのと支援の進め方、どちらをとるかという難しい判断となります。

本人さんと何度も会うたびに、この少年になぜ抗精神薬が必要なのか、必要だったのかと思いました。そこで、セカンドを受けていただきました。セカンドの意見は私と同じで、ごく軽い精神安定剤、それで効果がなければ気分調整薬という意見でした。それを現主治医に、お父さんがお願いという形で伝えられて処方されました。そしたら、今まで飲んでいた抗精神薬ではなくてとても軽い安定剤を1錠飲んで、しばらくしたら、「楽や」と本人が言ったとすぐメールが私のところに入ってきました。不必要な抗精神薬を長期間服薬せずに済んだことが、このケースの一番のラッキーだと思います。単位制の高校に行き始める際に、安定剤を服用してもちょっとしんどいとなったときに、お父さんがお医者さんなので、気分調整薬を少量服用させて送り出されました。また、通学になれ出したら減薬というか、断薬がしていけるだろうというふうに思います。

お薬に関して私は言及する立場ではありませんけれども、必要なときに必要な分だけ適切なお薬を服用するのが、その障害によって起こる二次症状と

共存するための一つの方策だというふうに考えています。そのことに関してもアドバイスをしてくださるようなドクターが出てきてくださるといいなというふうに思っています。

ご静聴ありがとうございました。